

場面特定的に出現する意図を含めたポイ捨て行動モデルの提案：大規模社会調査データ分析

氏名 桑山 りさ

指導教員 大沼 進

本研究はポイ捨て行動に着目し、ポイ捨て行動に至る過程を説明する独自のモデルを作成し、大規模社会調査データからモデルの妥当性を検討した。ポイ捨ての先行研究は多くが観察調査によって状況的要因を検討したが、ポイ捨てに至る意図などの過程は観察調査では明らかにすることができない。本研究は Bamberg (2013a, 2013b) の Stage model of Self-regulated Behavioral Change (SSBC) を元に改変し、ポイ捨て行動に至る要因連関を検討した。SSBC では、環境にやさしくしたいという一般的な態度である目標意図、環境にやさしい行動をしたいという行動意図、特定の場面で喚起される実行意図を設定し、目標意図から行動意図、行動意図から実行意図へと段階が進むことで個別具体的な行動に至り、行動変容が起こると説明した。従来の環境配慮行動のモデルは環境配慮的な意図と環境配慮的な行動を想定したが、ポイ捨て問題ではポイ捨てをしないつもりだという行動意図があったとしても、周囲にごみ箱がない、人がいないといった状況的要因の効果でポイ捨てをしてしまうと考えられる。よって、本研究ではポイ捨てしないつもりだという行動意図と、ある個別具体的な場面で発現するポイ捨てを許容する意図である実行意図をモデルに組み込んだ。本研究の実行意図は、SSBC と同様に、行動意図より強く行動に関連し、場面特定的に発現する意図としているが、環境配慮的でない方向の意図であり、行動と一対一で対応することを前提としていない点が SSBC と異なる。日本全国 18 歳以上男女個人を対象とした WEB 質問紙調査を実施し、4642 の有効標本を得た。構造方程式モデリング分析により、適合度の高い結果が得られた。実行意図がポイ捨て行動を直接規定していた一方、行動意図の影響は強くなかった。また、仮定とは異なり行動が 2 種類に分類された。行動意図は「ベンチの下に空き缶やペットボトルを置いてきた」といった行動には効果があったが、「ポケットなどに入れていたごみが飛ばされても追いかけない」といった行動には効果がないことが示された。本研究は、ポイ捨てしないつもりだという行動意図と、具体的な場面が与えられたときにポイ捨てを許容する実行意図というねじれを想定したモデルを提案し、質問紙調査からポイ捨てに至る過程を説明できた点に意義がある。